

# 学園

平成11年6月1日発行

財団法人

中国四国酪農大学校

電話 (0867) 66-3651

FAX (0867) 66-3652

# だより





校長  
小福田 満郎



酪農大学のキャンパスも、広大な蒜山高原の牧歌的な雰囲気なかでおだやかな春がおとずれ校庭の八重桜も満開に咲き誇る絶好の季節となりました。

さて、四月六日に第三五期生三四名の入学式を大勢の御来賓のもとに盛大に挙行いたしました。

全国各地から酪農に夢をいだき青雲の志を抱いて本校に入学してきた若者達が二一世紀の日本の酪農を背負って立つことになりま

す。二一世紀における地球社会の課題は、地球の有限性に由来する人口、食料、環境、エネルギー問題であるといわれています。世界の人口については現在の五億人から二一〇一〇年には、六九億人さらに二〇二五年には八〇億人に増加するものと見通されます。

食料については、人口の増加や開発途上国を中心とする国々の食生活の向上によりその需要がひっ迫する

事態も想定されておりま

す。国が食料輸入を拡大してい

す。世界では、現在でも八億四千万人の人々が栄養不足に苦しんでおり、これを早急に減少させ飢餓・貧困問題の解決に向けて努力することが国際的に重要な課題となっております。

わが国においては、近年所得水準の向上を背景に豊かな食生活が実現した反面、国内農業生産によりまかなわれる食料供給の割合は低下し、穀物自給率は三〇%と先進国の中では、きわめて低い水準となっております。

経済力にまかせて、わが

国が食料輸入を拡大して

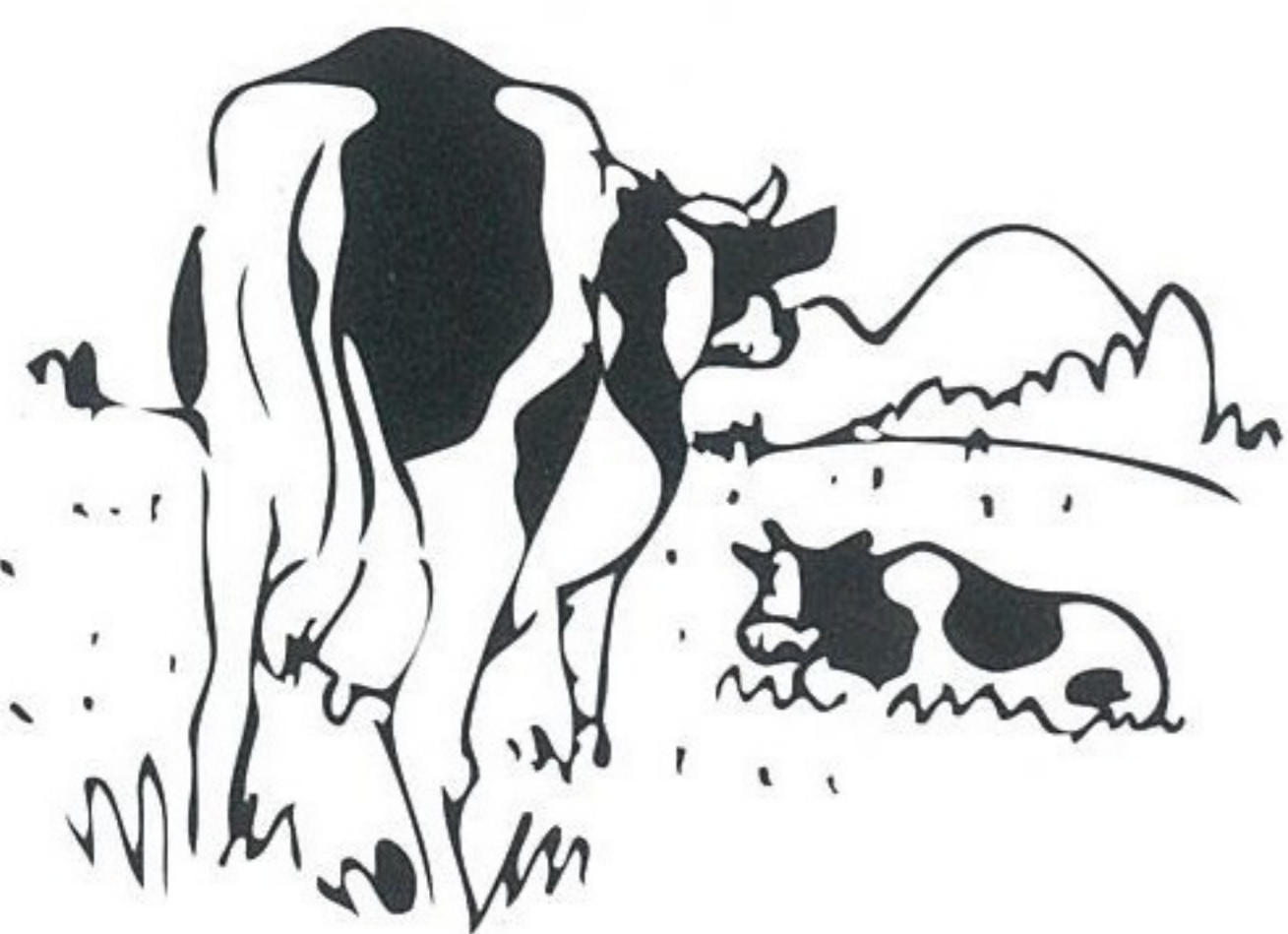
ことになります。

これからさらなる発展を目指している酪農大学校に関係者の皆様方の限りない御支援と御指導を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

わが国においては、近年所得水準の向上を背景に豊かな食生活が実現した反面、国内農業生産によりまかなわれる食料供給の割合は低下し、穀物自給率は三〇%と先進国の中では、きわめて低い水準となっております。

経済力にまかせて、わが

わが国の農業をこれまで中心的に担ってきた「昭和一代」がリタイアする時期が近づきつつあります。これを契機として自立の精神と優れた経営感覚、国際感覚を持った若い人々がわが酪農の中心を担う



# 教務課だより

## ○第三三期生

### 卒業証書授与式

平成十一年三月十九日、  
第三二期生二七名（別表）  
が卒業。  
理事長表彰

優等賞・北村恵美

校長表彰

優等賞

稲井文代・大西尊子

## 太刀野めぐみ

### 卒業論文賞

大西尊子・北村恵美  
波多江龍一郎・山本秀樹

## ○第三五期生入学式

平成十一年四月六日、第  
三五期生三四名（別表）が  
入学。

ここ数年、多数の学生が  
入学してきますが、本年度  
の三四名の入学は、過去二  
〇年では一度目の多さで  
す。また、女性が一二名と  
多く非常に華やかな学校生  
活となっています。

## ○学校のシンボル

### ポプラから白樺へ

長年酪農大学のシンボ  
ルであった第二牧場のポプ  
ラ並木が寄る年波には勝て  
ず、台風や大風の度に倒れ

少なくなってしまうし  
た。

もう一度ポプラを復活さ  
せようと試みましたが、ポ  
プラには、「嫌地障害」が  
あることなどからうまくい  
きませんでした。そこで  
「岡山県郷土文化財団」に  
より第二牧場に白樺を一六  
〇〇本植樹して頂きました  
た。何年か後には、高原の  
白樺が酪農大学のシンボ  
ルになっていると思いま  
す。

## 退職にあたり

前校長

神原 啓

蒜山高原も日一日と暖か  
さをまし草木のいぶきを感  
じさせる季節が到来、「春」  
この時節は本校の卒業生を  
送り出し、新たな酪農に夢  
をいだく若者が胸を膨らま  
せて入学してくる。一見移  
りゆく四季のように同じこ  
とを繰り返しているように  
見えるが、厳しさを増して

きている酪農情勢の変化  
や、入学してくる若者の個  
性の違い等から学校の雰  
囲気も異にしてくるものと思  
われる。特に最近において  
は二十一世紀農業を左右す  
るといわれ、更には世界貿  
易機関次期交渉を視野に入  
れたものといわれる農政改  
革大綱が公表され「食糧・  
農業・農村基本法」が制定  
される運びとなっている。  
その理念は、食糧の安定供  
給、農業農村の多面的機能  
の発揮、農業の持続的発展、  
農村の振興をうたい農政史

上はじめて食糧の自給率の  
目標設定、消費者の視点を  
重視した食糧政策、市場原  
理を重視した価格政策と経  
営安定対策、中山間地への  
直接支払いなど施策の転換  
が図られるものである。  
最も注視したいのが農業の  
持続的発展に係る担い手対  
策であり、打ち出される対  
策に期待したい。

者は、常に新しい情報を的  
確に分析し、創意工夫と先  
見性をもって努力する実行  
力と堅固な精神力が必要で  
あると思われる。  
時代は変われども食糧生  
産は国のもちである。  
農業、特に酪農は不滅の  
産業であり、現在のよう  
な変革の厳しさはあるもの  
元気をだして邁進すれば必  
ず明るい未来が待ってい  
る。  
明日の酪農を背負って立  
つ本校同窓のみなさんの御  
活躍を心からお祈りする。

## 職員紹介

平成十一年四月から機  
構改革の部制から課制と  
なりました。

校 長	小福田満郎
次 長	高山 介作*
(総務課)	
課 長	長尾 敏彦
主 事	津田 清子
	横内百合香*
(教務課)	
課 長	次長兼務
課長補佐	長尾伸一郎*
	岸戸 武士
運転技術員	池田 富幸
調理技術員	講元 勝代
	西田 良子
	池田 敦子
(経営課)	
課 長	貝原 裕彰
第一牧場長	経営課長兼務
技 師	守屋 吉英*
助 手	樋口 照夫
第一牧場長	平野 充生
技 師	高取 健治
	横内淳一郎
助 手	磯田 博
	池田 良弘*

\*印は、新職員

## 卒業生から

## 在校生から

## Get i Mate!?

第三期 北村恵美

私がオーストラリアへ行くことと決めた理由は、小さいときから英語が好きで外国に行ってみたくてという願望をずっと持っていたこと、雄大な自然の中での酪農を見てみたいと思っていたことにあります。

日本を出発してから飛行機で約半日、南オーストラリアのアデレードに到着しました。最初は、生まれて初めての海外生活に様々な不安を感じました。しかし、オーストラリアの明るさ、おおらかさのおかげで私の抱いていた不安も次第に消えていきました。誰とでもすぐ話をするし、目が合えば「hello」と笑顔でほほえんでくれる気

さくさが大好きでした。また、私が下手な英語で話しかけても、一生懸命理解しようとしてくれたのでとても嬉しかったです。

南オーストラリアには山がなく、ずっとなだらかで雄大な大地が続いています。私がホームステイした牧場にも二三〇haもの草地がありました。

ホームステイ先では、毎日搾乳、哺乳、待機所の掃除などをしました。搾乳牛は三〇〇頭ぐらいおり、搾乳時以外はいつも放牧しています。オーストラリアにいる牛はみんな野性的でたくましかったです。「牛はこんな風に暮らすのが一番幸せなんだろうなあ」「日本のように牛舎内で、牛をつないで飼うのはかわいそうだなあ」と思いました。子牛も離乳をしたら放牧に

出されます。だから牛は人に全く慣れておらず、触ろうと手を伸ばしてもみんな後ずさりをして逃げていてしまいました。

ホストファミリーの人達やオーストラリアで私が出会った人達はみんな親切で優しい人達でした。広い視野で色々な人々と話をする事ができたので、良い勉強になりました。様々な生活習慣の違いを知ることができたのも面白かったです。オーストラリアについてオーストラリアの文化を学ぶと共に、日本の文化を学ぶ、日本という国がどんなに特異な国かということがよく分かりました。また、今まで気付かなかった日本の良さを知る良い機会になりました。病気をして、日本に帰りたいと思ったこともありましたが、今となっては貴重な経験をすることのできた二カ月間として大切な思い出となつています。もし機会があれば、またオーストラリアに行きたいと思っています。



## 卒業にあたって

第三期 三崎俊祐

早いもので、後数ヶ月で卒業することとなりました。自分のこの学校を受ける時の動機は、高校の時、就職活動に失敗して、担任に「酪農を受けに行くか」と言われて、後々のことを考えて、「こつちの方が就職に有利だなあ」と思ったことです。そんな動機で入った学校ですが、二年間でたくさんのことを学びました。一年の頃は、早く作業

を終わらすのに、苦勞したこともありました。また、勉強の面では、まだまだ牛のことが解っていないという自分の未熟さを知りました。レクリエーションの蒜山登山の時は「何でこんなえらいことをするんだろう」と心の中で教務課の\* \*さんの悪口を言っていました。

こんな自分でも二年生になった時は、研修農家で慣れない生活、特に北海道の朝晩の気温の変化等に悩まされ慣れるまで大変な時期もありました。研修先の家族との接し方に戸惑ったこともありました。そんなときでも農家さんの暖かい優しさを知りました。どんなときでも「あほ」になつて、辛い作業も我慢し忍耐力も付き自分自身が一回り大きくなったように思います。この研修で自分のものを考える甘さ、仕事を任される責任感、時には自分をつぶして相手を立てることを、を教えられた感じがしました。

学校に戻ってから卒業までに皆でシンガポールに行つて、外人との接し方や物を安くする交渉の仕方などを学びました。とても楽しい旅行でした。人工授精、削蹄師、体内受精卵の免許を頑張つて取りました。これらの酪大や研修先で学んだことを生かして就職先の農協で、農家さんのために働きたいと思います。

元気を出して進もう。  
明日のために！

## 酪大の思い出

第三三期 山本秀樹

一年の時には、台風の直撃により第二牧場のポプラ並木が壊滅的な被害を受け、成長の早い木の脆さがでてしまいました。そして、翌日の授業が倒れたポプラの除去作業に変更となり、一日中汗をかきながら作業を続けました。また、月毎に行われる、校外研修から帰つ

て来た先輩の歓迎という名目の飲み会では、回を重ねる毎に友達や先輩との輪が深まっていきまし。酒を飲み過ぎて、その場にいた先生でも止められない奴もいました。それが酪大ならではの味で、またいいところだと思えました。

二年生になってからの、校内研修では、何も知らない後輩達を一から分りやすく教えなければいけないので、先輩達の苦労が分かり、人に教えるということの大変さが分かりました。

もつと大変だったのは、八カ月間の校外研修です。今までは、学校という中で三〇名で文句を言ったり、だらけたりですみましたが、農家に行くとき五〇日間農家の人達と衣食住を共にしなければなりません。そこには、先生や喧嘩のできる友達がいないので、最終的には、一から十まで自分自身でやっていかなければなら

ないということ学びました。

そういった経験がこれから沢山あるかもしれませんが、校内研修では経験できない貴重な経験が、校外研修ではありました。その経験を楽しくするのにも辛くするのも、やはり自分自身から話しかけること、何も考えずに毎日ひたすら仕事に明け暮れることが、楽しくするコツだと思えました。言うのは簡単ですが、実際にやるのはとても大変でした。

## 一年間を振り返って

第三四期 堀田厚子

たちにおいていられないようにと毎日毎日必死でやっています。

朝の作業は、5時半から搾乳をするのですが、初めの内は、一週間が本当に長く大変でした。でも、何回かやっていくうちに慣れてきて、朝の作業も楽しく思えてきました。実習で削蹄、去勢、除角などもすることができました。

この学校では、人数が少ないこともあって皆がすごく仲良く、まとまりがあると思います。月に一度のレクリエーションでは、春のバレーボール、野球、冬のスキーなど生徒や職員方も一緒に楽しめます。寮生活も初めてで、最初は皆と上手にいかないのではと緊張しましたが、女の子8人は、すぐにうち解けるようになり楽しく過ごしています。

六月になると校内研修を終え農家研修へ行きます。農家研修中は、一人でやっていく必要があるのでは不安もあります。しかし、学

校で学んだことを生かして頑張ろうと思います。

## 酪大に入学して

第三四期 美甘正平

僕が酪大に入つて一年が経ち、やつとこの生活にも慣れてきたと思います。入学当初は、作業の内容がよく分からなく、戸惑ったりもしました。また、初めての寮生活での不安もありましたが、今は、全く無くなりました。

この一年間で、ヘルパー研修やアルバイトで色々な農家へ行き、地元でもその農家によってやり方が様々なのが分かりました。

このことを今年の校外研修で生かして行きたいと思っています。

卒業後は、酪農ヘルパーになり経験を積んだ後に実家に帰り就農したいと思います。

# 第1牧場だより

例年になく暖かかった冬

も終わり、春本番の今日この頃ですが卒業生の皆様にはお元気で御活躍のこととお喜び申し上げます。平成一一年度の第一牧場の陣容は、新たに守屋技師を迎え、貝原場長、樋口助手で頑張

っています。

一〇年度の牧草状況ですが、前年度トウモロコシ畑にチヨウセンアサガオやイチビが繁殖し学生を動員し搾乳後に毎日除草したうえに、収量は最悪だったという苦い思い出から心配していましたが、牧草サイレージは、例年並、トウモロコシは二つのバンカーサイロいっぱいの一〇五と予想以上の豊作でした。



乳用牛においては家畜改良の見地から受精卵移植技術を積極的に活用し、一〇年度は一〇頭に移植しました。この内何頭かは受胎しており本年秋頃分娩してくれることを楽しみにしています。また牛群の質は職員・学生一同の努力のおかげで年々良くなっており、



共進会には必ず出場し優秀な成績を収めています。共進会の牛は、学生が毛を刈り調教し出場するため、これにより学生の志気を高めています。

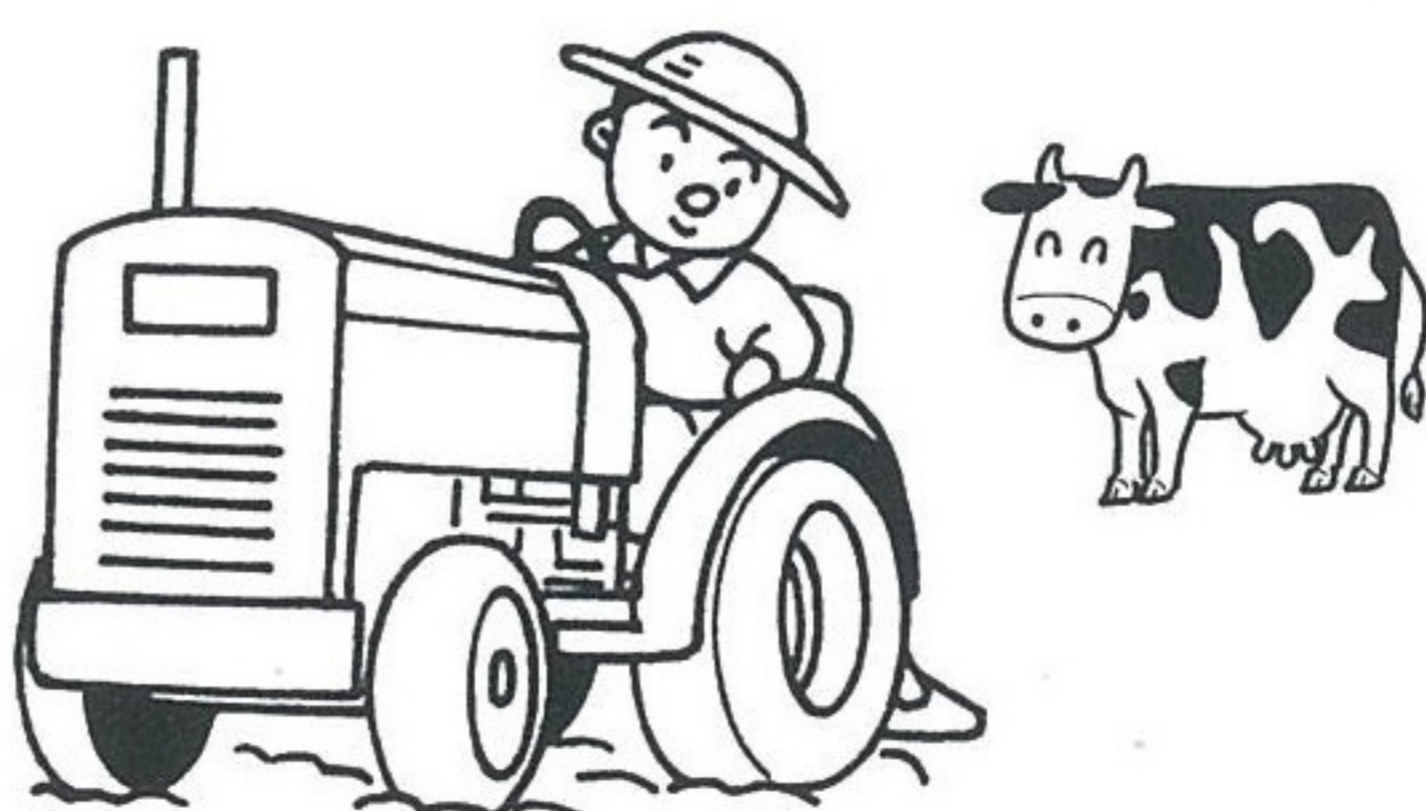
肥育牛においては従来、肥育前期〜後期にかけてワラを与えていましたが、一〇年度後半より前期は、バミューダグラスに変えています。これによる影響は

今後検討すべきところで

す。なんとといっても施設面の目玉は、堆肥施設及びサークルコンポ方式の発酵槽の建設です。この堆肥舎面積は八八六㎡で従来の小さな堆肥場に比べ、大量の堆肥が処理でき大変便利の良いものとなりました。

また、今年も酪大でたくましく育った若者が卒業し、一方で、夢に胸を膨らませた新入生が三四名入学してきました。卒業生の皆様には酪農大の近くに

お寄りの際には、昔皆様が夢を育んだこの酪大に足を運んでくだされば幸いに思っています。心よりお待ちしております。



## 飼育頭数

平成11年4月1日

区分	第一牧場	第二牧場
経産牛	44	103
育成子牛	31	42
乳用牛計	75	145
肥育牛	45	—
繁殖和牛	3	—
肉用牛計	48	—
合計	123	145

第2牧場はジャージー牛 (単位：頭)

# 第2牧場だより



第二牧場の草地も緑色を増し、牧草が勢い良く伸びる季節となりましたが、卒業生の皆様には益々御活躍のこととお喜び申し上げます。

さて、昨年度は第二牧場にとって大きな変動の一年でした。

まず、搾乳牛については四月に新築のフリーストー

ル牛舎へ移り、その後ミキシングフィーダーの導入によりTMR給餌体系としました。従来のつなぎ飼いに比べ、ストレスの軽減、労力の軽減、発情発見のしやすさ等のメリットが多いですが、個体管理や放牧体系との組み合わせが難しく、試行錯誤しながら一年を乗り越えました。移動当初は、まずフィードステーションで餌を食べることを牛に覚えさせることが必要で、学生とともに牛の教育も行いました。

そして、育成牛については、年が明けて一月に新しい育成舎が完成しました。これは、従来の間伐牛舎、育成舎、保護室の全頭を、搾乳牛舎とつながった一つの屋根の下で飼うことができ

るという牛舎です。新牛舎では育成牛、乾乳牛はフリーバーン方式で、また旧保護室と同様に分娩房、治療房なども備えられています。そして最も注目されるのは、哺乳牛の自動哺乳、自動給餌が行えるところです。現在五頭程度の哺乳牛をここで群飼しています

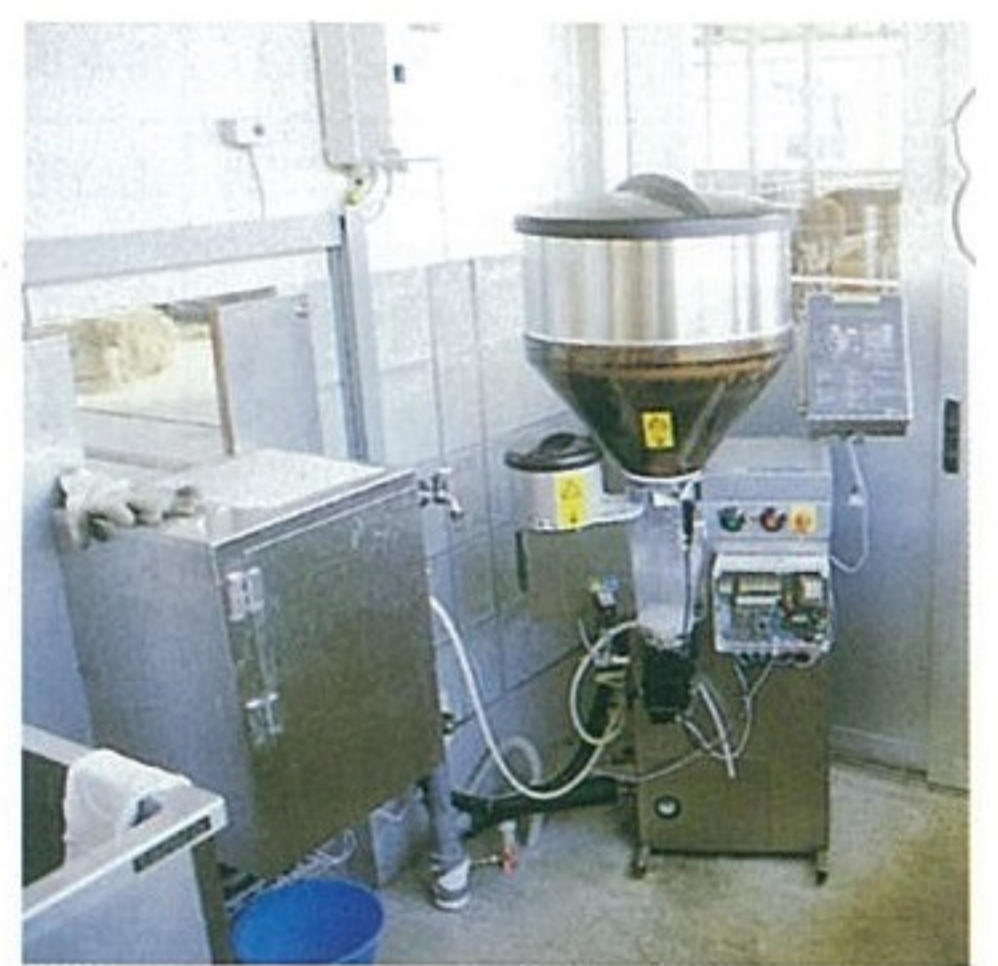
が、子牛たちは哺乳ロボットにも次第に慣れ、毎回一定の温度で、それぞれ決められた量を飲みたいときに飲めるため、下痢の発生がほとんどなくなりました。

また、餌の食い込みに合わ



せて早期離乳を自動的に行えるので、無理な離乳もななく、健康な牛に育てることができます。初めての試みが多く、軌道に乗るまでまだまだ工夫が必要ですが、この牛舎で、乳をたくさん出す大きな牛を育てたいと思います。また、糞尿処理については、以前は堆肥化できない状態でしたが、攪拌式のサークルコンポを備えた堆肥舎が整備され、完熟堆肥の生産が可能となりました。

このように、大きく様変わりした第二牧場ですが、広大な飼料生産基盤は、変わることなく、ロールベ



ルサイレージやトウモロコシの生産、そして放牧に一層力を注いでいきます。

卒業生の皆様には、是非、第二牧場にお立ち寄りの上、御助言を頂きたいと思えます。ジャージーともども心よりお待ちしております。

